

宿の二階。

部屋の窓を開け放ち、遠くに見える係留地へとリアムが手を振った。「ふたりとも、大丈夫—!？」

その声が届いたのか、向こうでへたり込んでいたネックとノランが手を上げて応えた。

「よかった、無事みたい……！」

リアムは胸を撫で下ろした。

「ノア、大丈夫？」

リアムの質問に、隣にいるノアは返答の代わりに、曖昧に頷いた。

言葉を返せなかったのは、ほんの数十秒前……リアムの様子が奇妙だったからだ。



その時、窓の外から大きな音が聞こえた。

何かの鳴き声にも、爆発音にも聞こえる音。

「なんだろう……？」

ベッドに腰かけていたリアムは立ち上がり、窓に近づいた。

ガラスの向こうを窺い、木枠に手をかけて開きかけたその時、小机に置いていたランプの火がフツと消えた。

「きゃっ！」とリアムが悲鳴を発し、

と同時に、ぴた、とリアムは止まった。

暗闇の中、まるで全身を石膏で固められたように「カチン」となって、声を発さず、驚いて両手を胸の前で上げている姿勢から動かなくなった。

「リ、リアム……？」

不審に思ったノアは、リアムの元へ行って顔を覗きこみ、

「どうしたの……？」

と言って、驚いた。

リアムは目を閉じ口を開けたまま、息をしていなかった。

「リアム！」

ノアは慌てて、リアムの肩を揺すった。

反応はない。

何が起こったのかわからないが、これが異常事態であるということはわかる。

リアムを正気に戻すため、ノアは必死に名前を呼んだ。

しかし、いくら呼びかけても甲斐はない。

どうにかしなければ。でも、どうすればいいのか。

ノアは、とにかく助けを呼ぼうと窓を開ける。

誰か、誰かいませんか——。

そう大声を出そうとして、息を飲んだ。

眼下の道。市場方面の様子を遠巻きに窺っていた数人の人間もまた、リアムと同じように、直立不動のままで、ぴくりとも動いていなかったのだ。

人間だけではない。海も、船も、街灯の明滅も——。

「どうしよう」

ノアは部屋を出ようとして、ベッドに躓いて転んだ。

そうだ。まずは明かりだ。この暗闇の中では、明かりがなければ動けない。

ノアは手探りで廊下に出、壁に掛けてある燭台の明かりを頼りに階段を降りた。

一階のロビーにランタンが置いてあった。

宿主は書き物の途中で静止している。

「お、お借りします……！」

ノアは固まる宿主に言ってランタンを持ち、自室に戻った。

まずはリアムを助けないと、持ってきたランタンを置いた時、

「え……？」

明るさを取り戻した部屋の中で、何事もなかったかのようにリアムが動き始めた。

「きゃっ……てあれ？ 今、暗くならなかった？」

言いながら、リアムは不思議そうに室内を見渡し、それからノアを振り返って、

「ノアが明かりを灯してくれたの？」

「あ、え？ う、うん……？」

「……そうだよね？ 気のせいじゃないよね。ありがとう」

ノアはたどたどしく頷いて、

「ね、ねえ、リアム……」

「なに？」

「その……へ、平気……？」

リアムは少しだけ恥ずかしそうにして、

「あー、実は暗いのが苦手で……驚かせてごめんね」

そうしてリアムは窓から顔を出し、係留地のネックとノランを発見したのだった。